

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/09/01 ～2018/09/30)

1. 勉学の状況

特に書くこともないので、今月もお休み。

2. 生活の状況

【東南欧 26 泊 28 日の旅：プラハ後編

～プラハに来たらこれを食べ！市内に唯一あるあのお店をご紹介～】

これまで7都市を旅をしてきてわかったのは、自分の想像以上に日本食がヨーロッパに浸透してきているということだ。インターネットで検索すれば沢山の日本食屋が出てくるし、都市によっては、歩いているだけでちらほら見かけるくらいだ。ヨーロッパも当たり前のように箸を使い、舌鼓を打っているのには驚かされたものだ。そして8都市目・プラハには、ただ一軒だけ日本を代表するあの料理を提供する店がある。ドイツ行きの列車に乗る日、朝一で食べに行ってみた。

中に入ると、オシャレなカフェのような内装で、インテリアにはテーブルと椅子だけでなく、ソファや観葉植物もあり明るい雰囲気。開店早々入ったので、他のお客さんはいない。注文を済ませて待つこと10分。ゴトッとテーブルに置かれたのは、黒い器に独特な色のスープをたたえ、細切りのネギ・福神漬け・メンマ・煮卵が彩りを作っている。もうお判りだろう。そう、ここはプラハで唯一のラーメン屋である。私はとんこつラーメンを選んだのだが、これが美味しいのである。アッサリとしているのだが、決して薄いわけではなく、“味わい深く飲みやすい”スープなのである。正直これは、日本でも戦えるレベルの味で、今のところヨーロッパの中で一番美味しいラーメンである。(わざわざヨーロッパに来てラーメンなんて…)と思う方、そこらのレストランで食べても別に感動するわけではないので、レストラン選びが面倒になったときは迷わずここに行くことをオススメする。

【東南欧 26 泊 28 日の旅：ドレスデン編

～他国の素晴らしさも紹介するツヴィンガー宮殿～】

3月24日、日本より北のプラハでも春の訪れを感じれるようになったこの日、人生初の“朝ラーメン”をまさかのプラハで体験し、予想以上のクオリティに大変満足した筆者と友人は、国際列車EC(ユーロシティ)2等コンパートメントに乗り込み、一路ドレスデンを目指す。山間部を流れる川を窓越しに眺めながら、筆者は少し哀愁を感じていた。長く旅をしていると、(これから先、永遠と世界のどこかを訪れては、また旅立ちを繰り返していくのか…)なんて錯覚してしまう。だから、“ドイツに帰る”という事実を認識した瞬間、信じられずに思わず笑ってしまったが、列車が進むにつれて、旅の終わりも近づいてきているのだと思うと、真綿のような哀しみが心を包み込む。14時30分、ドレスデンに到着。駅近の綺麗なホテルにチェックインして休憩した後、学割のある日本食屋(これがまた美味しいのだ)で晩御飯を済ませてその日は終わった。

翌日、夕方のベルリン行きの列車まで時間があるので、観光場所として有名なツヴィンガー宮殿に向かった。全体の造りとしては小さい洋風皇居のような感じで、宮殿の周りをお堀が囲っている。内側は中庭になっており、宮殿を1枚の写真に収めようとゆっくり回っている人がちらほらいた。宮殿も十分に美しくて結構なのだが、中には美術館があるということなので、入ってみることにした。美術館は中世絵画や彫刻を扱っており、有名どころではクラナハの絵などが飾ってあったが、上の階に上がると風景画が展示されていた。そこにあったヴェネツィアの風景画を観て、筆者は驚いた。つい先日行ったヴェネツィアとほぼ同じ景色が描かれていたのだ。普通、街は100年もすればほとんど変わってしまうものだが、ヴェネツィアは少なくとも江戸時代初期の頃からほとんど変わらずにある街だったのだ。何気ない街の風景のワンシーンなのに、自分がそこを歩いたかどうかがわかるのだから、いかにヴェネツィア市民が、イタリアという国があこの街を守ってきたのかがよくわかり、ヴェネツィアの偉大さに感服しっぱなしな筆者であった。

【東南欧 26 泊 28 日の旅：最終話～ただいま、って呼べるかな～ 前編】

ドレスデンから3日後の3月28日朝、筆者はベルリンにいた。ベルリンで

も観光はしたのだが、前の報告書(※2018年01月分参照)でベルリンの様子は紹介したので、ここでは省略させていただく。いよいよデュッセルドルフへと帰るこの日、私はうきうきしながらホテルで身支度を整えていた。今回は、DB(ドイツ国鉄)で現在最速の列車、ICEの1等車両に乗車するのだ。(初めて乗るICEがいきなり1等、いいんですかねえ…)とか思っているうちに準備が終わったので、足早にベルリンHbfに向かった。

さて、ここでDBの特急車両における1等車と2等車の違いを説明しておこう。主な違いは2つあり、1つは座席の質、もう1つは特典の有無である。座席の配置は2等車両が2×2の1列4席、1等車両は2×1の1列3席となっており、当然1等のほうが座席の幅が広い。シートピッチも広めに設計されており、大柄なドイツ人でも楽に足を伸ばせる。また、1等車両利用者は特典として、乗車前・乗換駅・到着駅にある専用ラウンジを無料で利用でき、軽食・飲み物をいただける。これだけの差がありながら、早い時期に予約すれば10、20ユーロの追加料金を払えば1等車両に乗車出来るのだから、おいしい話である。(※2018年8月からDBはサービスを変更し、最安値のチケットを取った人はラウンジが使えなくなったのでご注意を!)

朝9時半、ベルリンHbfに着いた筆者は早速ラウンジに入った。チケットにあるQRコードを読み取り機にかざすと入ることが出来る。スタッフに「奥に行ってください」と言われたので大人しく行ってみると、別のスタッフが立っており、再度QRコードを機械で読み取った。どうやらこのベルリンのラウンジ、1等車両利用者のために専用スペースを別で用意しているようで、突然のプチVIP待遇に驚きながら椅子に腰掛けるのだった。

さて、ひとまず落ち着いたところで飲み物でも取りに行こうかとした時、スタッフの方が話しかけてきた。

「おはようございます、軽食が選べますが何になさいますか？」

「……えっと、今日は何がありますか？」

「クロワッサンは無くなってしまいまして、サンドイッチと〇〇(よく聞き取れなかった)がございます。」

「じゃあサンドイッチで」

「わかりました。何かお飲みになりますか？」

「コーヒーを」

「かしこまりました。」

そうやってスタッフの方は奥に行き、5分後には自分の席に持ってきてくれた。飲み物を取る手間も取らせない、徹底したサービス。(ドイツにもこんなサービスあるんだなあ)と感心したものだ。食べ終わると「何かまだお召し上がりになりますか？」と聞いてきたので、結局サンドイッチ1

つにコーヒー1杯を追加でいただいた。もしかしたら、おかわり自由なのかもしれない。(実際にはやらないが)

あまりに良いサービスに思わずラウンジに長居してしまい、ダッシュでICEに乗り込む羽目になったが、息を切らしながらも無事に自分の座席へとたどり着いた。今回は1列席を予約。黒い合皮のシートに可動式ヘッドレスト・フットレストがあり、左下にあるレバーを引くと、座面と背面が連動してリクライニングする。テーブルは前後に動かすことは出来ないが、各席に1つずつコンセントがあり、パソコンやスマートフォンの長時間利用にも対応している。座ってみると、皮のシートがしっかりと身体を包み込み、リクライニングしても座面が動くので、浅く腰掛けても長時間座っていられる座席であった。息が整ったところで、終着デュッセルドルフまで後4時間…。

【東南欧 26 泊 28 日の旅:最終話～ただいま、って呼べるかな～ 後編】

たまたま通りかかった車掌を呼び止めた。連結されている食堂車を予約無しで使えるかどうかを確認するためだ。すると「使えますけど、そうしなくとも座席までサーブしますよ。」と返ってきた。なんということだ…。食堂車に行く手間すらもかけさせないとは、1等車両に乗るだけで随分な待遇になるものである。

注文したコーヒーとチョコレートケーキを時折口に運びながら、筆者はここまでの旅を振り返ることにした。スイス・リヒテンシュタイン・イタリア・ハンガリー・オーストリア・チェコ…28日かけて、陸続きの6ヶ国を周ってきた。数百キロ移動しただけで、言葉・慣習・景色などあらゆる部分が変わってしまうのに、同じ大地の上にあるというのは、島国日本に留まったままでは理解し得ないことだろう。今回周った国々の存在自体は当然日本にいた頃から知っていたが、留学先のドイツを起点にして位置関係を実感できたのは非常に意義深かった。そして今、約5ヶ月過ごしたデュッセルドルフに戻ろうとしている。短い期間とはいえ、居を構え日々を過ごし、さらに半年は過ごしていく場所だ。(デュッセルドルフが自分にとって、「ただいま」って言えるほどの思い出と繋がりのある場所になったんかな、それとも今回巡った都市と同じで、どこかアウェー感を覚えるんかな)、なんて考えると、旅に出ることがこれまでの生活を俯瞰的に見るきっかけにもなっているのだと考えさせられる。随分生意気な考えをしたものだ。ダルマイヤーのコーヒーは、そんな考えを嗜める大人の苦さ

だった。

コーヒーもケーキも思い出巡りも、満喫すれば4時間なんてあっという間で、ICEはデュッセルドルフ Hbf のホームに滑るように入っているところだった。28 日ぶりの見慣れたホーム、エスカレーターを降りて出入口へ向かう。(よく無事に帰ってきたな)、目に入る全ての光景が自然と筆者にそう思わせた。通路を行き交う人々・構内にあるファストフード店の並び・駅を出ると現れる、薄汚れた灰色のコンクリートの道・その先で走っているバスや路面電車。どの国にもありそうな、平凡な風景。路面電車に乗って大学の寮に帰った。鍵を開けると、28 日前と変わらぬ筈なのに、奇妙に新鮮味のある空間が広がっていた。これまで旅を共にした靴とスーツケースを転がして、ダウンコートも服も脱ぎ捨てて、ベッドに飛び込むや否や夢でも見ているかのように小さく呟いた。「ただいま」そう言って眠り始めた私は、一体何に安心したのだろうか。

【完】